

哲学者が教える工学倫理

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3347

5 哲学者が教える工学倫理

柴田 正良

1. 倫理は儲かりませ（？）

哲学の2つの視点

ここ数年の日本における企業の不祥事は、その数と質において、政治家の不祥事に勝るとも劣らないものがある、たとえば、それがどれくらい危機的なものであるかが実感できよう（これもまた、もう1つの情けない話だが）。ある資料によれば、1991年から2000年までの10年間で何らかの不祥事により経営のトップが辞任したものは、大手企業で合計79社、辞任したトップは103人に上る。この中には、JCOの核燃料の不適切な取り扱いによる放射能漏れ(1999年)、三菱自動車によるリコール隠し(2000年)、雪印乳業のずさんな生産体制による食中毒(2000年)など、まだ記憶に生々しい事件もあるが、それ以降も、いわゆる狂牛病(BSE)問題に端を発して次々に明るみに出た食品業界の産地偽装工作など不祥事はとどまるところを知らないようである。

もしあなたが専門的な技術者であっても、日本のような産業技術構造においては、医者や弁護士のように個人営業のスタイルを取ることはまずなく、企業の一員として雇用され、その組織の存続があなたの成功の前提条件となるであろうから、あなたが直面する倫理的問題は、以上のような企業の直面する倫理問題の一部として出現することがほとんどだと考えていいだろう。その場合、〈技術者の倫理〉としての工学倫理の特殊性は、むしろますます〈みんなにとっての倫理〉の一部なのだということがはっきりするだろう。そしてそれは、哲学の視点からすると、2つの意味で歓迎すべきことだと私は考えている。

そう、工学倫理を学ぶ人たちに哲学が提供する視点は、少なくとも2つある。1つは当たり前のことだが、工学倫理はあくまでも「倫理」であって、もう1つの計算問題や姿を変えた設計問題に解消されてしまうわけではない、という視点である。これは、本書の中で技術者の卓越した地位や工学倫理の特異性を学んで

きたあなたには、少しばかりがっかりするようなことかもしれない。「なあんだ、哲学者が出てくると、すぐカビの生えた暗い話に逆戻りしたがるよね。せつかく、重苦しい〈倫理的決断〉なんてもものから解放されようとしているのに」、と。けど、まあ、待つてほしい。見せかけの明るさや気楽さが、結局は単なる付和雷同と思考停止の結果であることは珍しくないし、それをあなたもいやというほど経験してきたはずだ。さて、哲学が提供できる第2の視点とは、技術者が自分の存在理由としている当のもの、つまり技術や科学もまたそれ固有の倫理的問題をはらんでいる、という視点である。この問題は、例えば遺伝子改良食品をどこまで、どういう基準で許すのかといったことや、新たな農薬の開発と環境破壊と人口問題の三者の兼ね合いをどう解決するかといったことにとどまらず、科学と技術なしでは生存できなくなってしまった人類という存在のあり方を、一度、宇宙におけるその誕生から滅亡までの中で考え直してみる、ということまで含むだろう。「ええ、そりゃちょっと、ホラの吹きすぎじゃないの？ 内部告発なんていう話からいきなり〈宇宙における人間の位置〉までいくわけ？ どこかの古い形而上学じゃあるまいし、無理があるってもんでしょ」。いやいや、いささか気恥ずかしさを押し隠してあなたに言わねばならないが、まさに工学倫理は人類の文明、人類の存在における科学と技術の倫理的あり方の問いへとつながっていかねばならないのである。もしもこの2つの哲学的視点が欠けてしまうなら、工学倫理は、技術者の組織内部での〈処世術〉程度にまで薄められてしまう可能性があるだろう。あなたに嫌がられ、時代錯誤だと誤解されるのを承知の上で、哲学者がしゃしゃり出てくるゆえんだ(ソクラテス以来どこまでも、哲学は牛にたかる一種のアブなのだろう)。

儲からなければ倫理的でなくていいのか？

というわけで、哲学の視点から、工学倫理に関して大変に気になる兆候を1つ指摘しておこう。それは、あなたもすでに何度か耳にしたことがある、「倫理は儲かる」というキャッチフレーズである。あるいは、こうも言われることがあるかもしれない。「いまや倫理的でなければ企業は生きのびられない」。なるほど、反倫理的な行為によって一時は利益を上げた企業でも、それが発覚した後では必ず社会的な制裁を受け、大幅な減益、損失をこうむり、果ては倒産にまで追い込まれることもある。だから、反倫理的、反道徳的であることは、長い目で見れば割に合わないことなのだ。というのも、天網恢々疎にして漏らさず、悪事は必ず露

見するようにできているからである(本当か?)。もちろん、このような主張がなされる時、ふつう強調されるのは、反倫理的であることは常に多大な損失を招くという〈事実〉ではなく、反倫理的であることが割に合わないような制度、社会を作り出し、それを維持していくべきだという〈要請〉である(駐車違反をなくす名案は、と突っ込まれて、「違反者は死刑」と返したジョークを思いださせる)。要するに企業であれ個人であれ、腐敗した周囲環境の中でただ1人、倫理的であることを貫くのは、土台無理な超人的踏ん張りというわけだ。やっとアルバイトに採用されたばかりのあなたが、社員ぐるみの日常的な不正行為にどうやって抗議の声を上げることができようか。

しかし、儲からなかったら倫理的でなくていいのだろうか? いや、言い方を変えれば、もっぱら「儲かる」という理由だけで倫理的であったとしても、倫理的であるなら何の問題もないのだろうか? 哲学の答は「断じて否!」である。1970年代初めの有名なフォード社のピント事件を考えてみよう。フォードは、あろうことか小型車ピントの開発の際に、予想された衝突時のガソリン・タンク炎上による死者・負傷者への損害賠償(死者1人当たり20万ドルを計上)と、1000万台を越える販売数だが1台あたりわずか11ドルの改善経費とを一種の秤(費用便益分析)にかけ、改善処置を見送ったのであった。さて、このときフォードは、事故に関する損害賠償だけでなく、その後に自社が実際にこうむったトータルな損害をも正確に見積もることができたならば、改善に必要な経費を惜しまなかったであろう。結局フォードは、その費用をケチったおかげで、とんでもない損失を出す羽目になったからだ。しかし逆に、フォードがその種の「費用便益分析」の正確な結果〈だけ〉を理由にピントの改善を行ったのだとしたら、フォードはたとえ結果として炎上事故を未然に防いだとしても、なお倫理的に非難されるだろう。その場合、一体フォードのどこが倫理的によくないのか、あなたも考えてみてほしい。一般に、リスクとコストのトレードオフを計算すること自体が倫理的によくない、というわけではない。しかしわれわれは、このフォードの場合、その費用便益分析のやり方のどこかが倫理的におかしいと感じているはずだ。その〈感じ〉こそが、あなたに、〈倫理的な考慮を他のタイプの考慮から分かつ独特なもの〉を告げ知らせているのである。哲学は、あなたにその〈感じ〉をしっかりと保持してもらいたいと望んでいる。

さて、「倫理的でなければ儲からない」、そんな社会制度や社会慣習が多くの人のびとの苦勞の末に築き上げられたとしてみよう。そこではまさに、倫理的である

ことは儲かることの前提条件である。したがって、人びとや企業は利益を上げるためにこぞって倫理的であろうとするだろう。「わが社は人命や安全を第一に考えています」、「この製品は地球環境に負荷をかけないことを第一に開発されました」。しかしなぜ、人命や安全や地球環境が第一なんですか? 「……うーん、実はそうしないと儲からないですよ。でも、だから本当にそれらが第一なんですけどね」。もちろん、このような社会は、英雄でなければ倫理的であることを貫けないような腐敗した社会より望ましいに決まっている。だから哲学は、倫理的な人を褒めたたえるためにあえて「儲かるから倫理的である」社会を「倫理的だから儲からない」社会へと変えるべきだ、などと主張しているのではない。しかし、何のために人は倫理的であるのかという角度から見れば、〈何か別のもののために倫理的である〉ことと〈倫理的であるために倫理的である〉こととは、どんな理屈をつけようともまったく別のことである。だからあなたには、「倫理は儲かる」というキャッチフレーズの目新しさと口当たりのよさに安心して、「儲からなくても倫理的であれ」という哲学からのメッセージを曖昧にしてほしくはないのである。

2. 倫理的な思考とはどういう思考か?

それでもアミーが悩むこと

工学倫理が倫理問題と設計問題との類似性を強調し、設計上の問題解決の視点から多くの教訓を引き出しているのは、環境倫理や生命倫理といった他の応用倫理にとっても重要なことである。確かに、これまでのいわゆる規範倫理学の問題設定とその解決法のパラダイムは、「お経」を唱える哲学史の講義と同じくらい、現実離れした硬直さで人を憂鬱にさせ、意気消沈させるものであった。それに対し、倫理問題を選択肢の決定問題から解放し、情報収集の大事さを説き、同時並行的な複数の解決策の実行を勧める工学倫理は、明るい場所に技術者を連れ出してくる魅力的な提案に満ちている。しかし、ここでも哲学は、あなたに嫌われるのを承知の上でこう言わなければならない。倫理的思考は倫理的思考であって、設計の思考と完全に取り替えることはできない、と。例えば、ウィットベックが新たな工学倫理の発想を次の話の中に託しているのは、鮮やかというほかはないのだが……

奥さんの命を救うための薬を買うお金がないハインツは薬を盗んでもよいだろうかと問われた少女のアミーは、盗むのでもなくハインツの妻を見殺しにするのでもない、新たな選択肢を提案したのである。

「そうね、そうは思わないわ。盗まなくてもきっと何か方法があるはずよ。お金を借りるとか、ローンを組むとか、何かあるわ。とにかく薬を盗んじゃ絶対ダメ……それに奥さんも死んじゃダメよ」。

なぜ薬を盗んではいけないのか尋ねられて、アミーは答えた。

「もし薬を盗んだら、奥さんの命はきっと助けられるでしょうね。でも盗んだりしたら、牢屋に入らなくちゃならないでしょ。そうしたら奥さんはまた病気がひどくなるし、もう薬をあげられないんだから、よくはならないわ。だから二人でもっと一生懸命話しあって、お金を作る何か別の方法を見つけなくちゃ」。

アミーのような少女ならきっと、同じような苦境に立たされたとき、何かすばらしいアイデアを思いついて、気の滅入るような〈あれかこれか〉の選択問題を回避することができるだろう。しかし、忘れてはならないが、そのことによって〈盗みか見殺しか〉という倫理問題は、回避されはしても解決されたわけではない。想像力を思いきり働かせて、さらなる倫理問題を発生させないような仕方での問題を解決することの重要性は、何度強調してもしすぎるということはないだろう。しかし、それがいつもうまくいくとは限らない。ある講義で、「あなたが望まない妊娠をしてしまったら、妊娠中絶は許されるだろうか?」と問われた女子学生の多くは、「そんな状況にならないようにすべきです」と答えた。それは確かにそうだが、「じゃ、のっぴきならないその状況に〈本当に〉置かれたらどうなのか」という問いに対する答えにはなっていない。われわれはできることなら〈あれかこれか〉の不快な選択肢から逃げ出したい。しかし逃げおおせることがいつでもできるとは限らないからこそ、倫理的思考は必要なのである。「お金をつくる別の方法」が誰かの悪事を見逃すことや、誰かの職を奪うことや、誰かに返済不能の借金を申しこむことだとしたら、アミーはもとの倫理問題の代わりにもう1つの倫理問題を呼び出したことになるだろう。恐らくこの世界は、まれな場合にしか、倫理問題の〈完全な消滅〉を許さないのだ。というのも、そのような〈完全な消滅〉を、われわれはわざわざ〈幸運〉と呼んでいるからである。

倫理的ヴィジョンはあなたの味方だ!

アミーと同じようにあなたもその苦境に立たされたとしたら、何らかの形で倫理問題に直面し、倫理的思考をめぐらさなければならないだろう。〈盗み〉という行為がどれくらい悪なのか。〈盗み〉というのは何があっても許されない行為なのか。妻を〈見捨てない〉結果としてどんな善が生じてくるのか……。確かに誰だって、このように煮詰められた問題にきちんと向き合うのは苦手である。できればそれに背を向けて逃げ出したい。むしろこういう問題の方こそ非現実的なのだ、と言いつつ返したくなる。

だが、そう暗く沈み込み、わが身の不運を嘆くことはない。このようなとき、哲学はあなたに2つのヴィジョンを提供することができる。1つは〈創造〉であり、もう1つは〈目的〉である。そうだ、視点を高くして、この世界の全時空の広がりの中の自分の位置を確かめてみよう。宇宙が誕生し、銀河系が誕生し、太陽系惑星・地球が誕生し、生命が誕生し、人類が誕生し、そしてあなたはそのような時間系列の中の一瞬としてきらめき、暗闇の中に消えてゆく。あなたはこのパースペクティブの中で、ほとんど自分が無になったように感じるかもしれない。しかし、時空の広がりをもう一度、倫理的な眺めから見直したなら、そこには、あなたをメンバーの1人として含む倫理的な共同体が、人類の存在と重なるようにして存在しているのが見えるだろう。あなたは1人で孤立しているのではない。あなたはこの倫理的共同体の重要な1人だ。ソクラテスやマザー・テレサはあなたのすぐ横にいる。しかもあなたはたんにその共同体の受動的なメンバーなのではなく、あなたの行為がこの共同体とその歴史を創造するのである。なにも、あなたはこの倫理的共同体のために行為すべきだ、自分の生を捧げよ、というのではない。そうではなく、試練のように繰り返し生ずる倫理問題をむしろチャンスとして、あなたはこの倫理的共同体を少し広げ、その質を少し高め、それに輝きを少し加えているのである。だから、倫理問題を解決することは孤独な負の作業ではない。この宇宙に新たな何かを作り出す〈創造的〉作業なのである。

そして、このような倫理的な眺めから見るとき、あなたはもう1つの重要なヴィジョンに気づくだろう。いったいそもそも何のために自分や、自分たちは存在しているのか? その答えがすぐに出せなくともかまわない。あるいは、その答えはふつうの意味では存在しないのかもしれない。しかし大事なことは、この〈目的〉のヴィジョンから再び自分の現在の状況を確認してみたなら、たいがいのこと

はその目的よりはるか手前にある日々の要求や欲求を満たすためのものだということが分かるだろう。だから、倫理問題に直面したら、まず落ち着いて深呼吸をして、「目の前のこの儲けや成功や保身は、本当にそれほど大事なことか？」と問うてみよう。実際のところ、われわれは科学知識や技術革新のおかげで、ソクラテスの時代とは比べものにならないほど豊かになった。だが科学や技術はそれ自体が〈目的〉なのだろうか。もしわれわれ人類が科学や技術をこれほどに発展させることなく、もっと原始的(?)な文化のままにとどまったとしてみよう。その文化は、野蛮で残酷で、不正や腐敗がまかり通る非合理的な文化なのだろうか。そう決まったわけではあるまい。確かに、そのような社会では人類は自然の猛威や、疾病の不幸や、飢餓の恐怖を今ほどには克服していないだろう。しかしでは、科学や技術の発達によって、われわれの文化はどれくらい倫理的に優れた文化になったというのだろうか。むしろ逆に、科学や技術が招き寄せた新しい形の倫理問題、例えば環境倫理や医療倫理などが抱える問題に、われわれはますます深く巻き込まれているのではないのか。いずれにせよわれわれは、すべてを意のままにできる神ではない。どれほどに科学や技術が発達しても、われわれの知識が有限であり、互に関わり合いながら生きていく限り、倫理問題を完全に〈消滅〉させることはできないのだ。

したがって、哲学が技術者の卵であるあなたに与えることのできる〈目的〉のヴィジョンからすれば、自分の存在理由そのものとあなたの考える科学や技術とは、ある意味では、鋤や鍬の時代の倫理問題を複雑で厄介な別の倫理問題に変えるだけの面倒な装置にほかならない。だからあなたは、人類がその存在以来かかえている倫理問題を同じく引き受ける点で彼らと連帯しているだけでなく、もし〈手段〉としての科学や技術が前より多くの新たな倫理問題を引き起こしているなら、毅然としてそれを拒絶することを彼らから期待されているのだ。あなたは、その勇気と力を〈目的〉のヴィジョンから引き出すことができる。あなたは、工学倫理を通して、人間のすべての倫理的次元につながっているのである。

注

(27) 池田耕一「なぜ企業倫理は必要なのか」(本書第5章(2)を参照)。

(28) C. ウィットベック『技術倫理1』(札幌・飯野訳)、(みすず書房、2000年)、p. 82。
なお、訳文は少し体裁を変えてある。

問題

1. 工学倫理は、計算問題や姿を変えた設計問題に解消されてしまうわけではないのはどうしてか。また、あなたはその考えを支持しますか。
2. 哲学が与える2つのヴィジョンとは何だろう。それが役立つとあなたは考えるだろうか。
3. 倫理的選択と経済的選択が衝突した場合には、どのような選択が可能だろうか。ピント事件を例にして考えてみよう。